

屈辱に耐えて抑留五年

神奈川県 北澤 治雄

はじめに

戦後、五十有余年が過ぎようとしている。シベリア抑留問題はまさに風化しようとしている。すべての国際懸案は引き継ぐと声明したロシアからは何の挨拶もない。ナチのユダヤ殺りに比すべきこの暴虐は風化させてはならない。事実を知っている者も大方故人になっている。できるだけ冷静に事実を書いておきたい。

逮捕・輸送

終戦、九月も下旬のある日、ソ側将校三人が当時の新京興亜街の私の宿舎に来て、「少し聞きたいことがある」と言って連行。途中、協和会総務部長武岡氏と中央本部長結城氏なども加えて、元

海軍武官府に収容。見ると満州国の要人、関東軍のお歴々などがいる。

これは長くなるなとは思ったが、別に悪いことはしていないし、当時私は軍人ではないから、まさか五年間の苦役になるとは全く思っていなかった。取調べは約一カ月の間に数回あったが、そう突つ込んだ話はなかった。拷問などはなかった。しかし、中には蒼白となってぐったりして帰ってくる人もいた。

私はここで印象に残っていることがある。背の高いがっしりとした体格の四十歳位のドイツ大使館書記官であった。かなり厳しい調べを徹夜でやられたりして、フラフラになって帰って来てはいたが、私に「ゲルマンはこれで二回ロシアに負けたが、我々は必ずスラブをやっつける。日本は初めてではないか、みんながんばれ」と言って、私に腕角力などを挑戦してきたことである。私は、昨日まで参謀肩章などを吊って威張っていた関東軍の将校のおろおろした様子と比べて、さすがと

思った。

寝具はなかったが、金さえ使えば差し入れがきいた。だんだん寒くなる頃、私には妻が矢絣の紫の着物で作ってくれた細長いふとんを入れてくれて助かったが、これはシベリアでパンに化けた。

十一月に入ったある日、トラックに乗せられたので釈放かなと思ったが、そのまま自分がそこで二年間教官として働いていた大同学院に入れられた。皮肉な因縁を感じた。見ると顔見知りがたくさんいて、「やあ、やあ」ということになった。

この頃はまだ皆元気で、中には差し入れのどてらなどを着込んで碁などを打っている先輩もいた。

ここはいわゆる輸送基地にしていたのだ。鉄条網を二重に張ってあったが、脱走を企てた者が犬ころのように撃たれてひっかかったままになっていた。私たちは、捕虜とは敗戦国軍隊の軍人及び軍属等、直接軍のために働いた者だけと思っていたから、まさかシベリアに送られるとは思っていなかった。事実、全くの商人、または飲み屋の主

人、大工まで民間人がたくさんいた。したがって、それぞれまとめて日本に帰国させるのだからくらいに皆考えていた。まことにおめでたい話である。

ついに私も亡国の国都の駅から詰め込まれて北に向かった。それでもハルピンから東行して、清津あたりから帰国させるのだからくらいに考えていた。翌朝、ハルピンで西に向き走り出したので動揺が車内に起きた。

食事が不足で一日に一度だけ。国境はもう雪だったが、ダルマストロブの石炭が少ないので困った。貨車の羽目にいた人は左足が凍傷となり、収容されてから切断手術をしたが結局死亡した。一番困ったのは水。牛を運ぶにも水は与えるのに、これが不足で「ワダー（水）、ワダー」の声が暗い貨車の中でうめきのようにもれ出した。

ある夜、大きな街に入った。イルクーツクだ。ここで入浴ということになったが、これは入浴よりも、流行し出した発疹チフス防除のための衣服

の熱氣消毒が主目的であった。ろくに食べていない体にむし風呂なので、のびてしまつて慌てて水をかけたりした。また途中、道ばたの雪をむさばるように食つたが、明るくなつたら炭塵で真っ黒くなつていた。

こうしてまた一日ほど走つて荒涼たる原野に下車した。もう足が絡んで、雪の上を這うように入られたところがいわゆるチェレンホーポ收容所で、一帯は炭鉱地帯である。私の五年間の苦役の出発である。

以下、日を追つて書くよりも、生活の態様を項目別に書くことにする。

一、居住

二重の鉄条網に囲まれた原野の中に八棟のバラック、半地下のものもあつた。急造で床など生木で凍つていた。体温で解けて毛布がベトベトになつたが、石炭はお手のものだから氷のベッドは間もなく解決。棚は二段または三段。三段のとき

ろは座ると頭がつかえる。縦二メートル、幅六十センチメートルくらいが一人分。窓にはガラスのないがあるので板や紙を貼つたりした。

便所は壕のように板が渡してあるだけ、扉などはない。用便中にたばこの火を借りたりする。棟によっては百メートルも離れていた。栄養失調と寒さで小便が近くなり、ねぼけ眼で雪に足をとられながら通うので、途中でやつてしまふ。明るくなると黄色の穴が沢山できるので監視が立つようになったが、監視自身もやるから余り効果はなかつた。私は二、三回收容所を移動したが、大体似たようなものであつた。

二、食事

動物にとつて、人間にとつて、そして捕虜にとつては、最も決定的な条件。

初めのうちはときどき欠食の日があつたが、これは間もなく解消した。一日分、黒パン（材料はよくわからないが、粟とかコウリヤンの粉、魚、

芋など）三百グラム（坑内の先山は四百）、かゆ（えん麦、粟、コウリヤンなど）飯盒の二分の一くらい三食、副食はなし。ソ側の説明では、魚肉などかゆの中、とあったが余り見かけなかった。

私はあるとき食料倉庫をのぞいたら、黒い山羊の頭が山のように積んであった。黒パンは湿気が多くて重いのでガサではレンガ一個くらい、たてまえ百グラム宛。三回に食べるのだから、皆一度に食べてしまう。後はかゆばかり。

ある人が「食事をとるとかえって空腹になる」と言ったが、僅かな食のために胃が活動するからだろう。まるで餓鬼。端的な例を挙げると、朝パンが一本上がる（五人分）、これを切り分けるのだが、切り手の手元を八つの目玉が見据えている。その目のすごさ。公平を期して物差しや秤をつくったりする組もあった。

往年の閣下が炊事の溝から黒くなった芋を拾ったり、空腹で頭がおかしくなって、隣のパンを堂々と食って殴られたり、ビタミン補給と言っ

て、野菜のアカザを食い過ぎて下痢するようなこともあった。すしを握る手つきをして生つばを飲み込むような日常であった。

一方では滑稽と言うか、主食なしで塩鮭一本を一人分としてくれたりする。これはソ側の担当者事務的無能に起因する。ときどき検査官が来て在庫と支給状態を調べるので、慌てて隠していた鮭を処分するために起こることで、迷惑なのは私たちである。ソ側の職員が堂々と一尾ぶら下げて帰るのをよく見かけた。捕虜の食料のピンハネである。

三、作業

作業と言うには余りに酷薄な労役であった。それは、鞭をもって馬を追うよりもひどい処遇だった。この労働者の祖国には作業に関する作文はあったが、それは現実の労役とは全く関係がなかった。ノルマというものが綿密にできていて、たとえば穴を掘る場合、土質が粘土か石まじりか

など、細かな条件が設定されているが、現実はいくらも作文である。

炭鉱の実情で言えば、各鉱区にナチャルニック（監督）がいて、彼らにとっては指示された炭量が決定的な重さで要求される。達成されないと、翌日はシャベルを担いで一ラボーチ（労働者）として炭を掘らなくてはならない。したがって私たちに強引に要求する。たとえば、その鉱区は水が多く湧き出して水浸しになって掘っても量が出ないことや、炭層が薄くて量が出ないことがあっても、まず手加減はない。八時間労働は十二時間労働になることもあった。しかし、これは後に多少是正されるようにはなった。

作業隊の編成については、採炭は二十四時間稼動するので三区分になる。一番立ちは八時―十六時、二番立ちは十六時―二十四時、三番立ちは零時―翌日八時まで、この三番立ちというのがつらい。朝帰っても宿舎は同じだし食事時間も一律だからよく眠れない。昼過ぎには二番立ちが出発の

準備を始めるし、一番立ちが帰ってくると眠れぬまま出発の準備をしなくてはならない。

手袋や防寒帽、靴の修理をして、十一時には出発。坑内は油壺のカンテラが頼りだからこれを整備して十二時には現場で交代しなければならぬ。

番立ちは十日ずつの交代だが、五日もすると顔色は青黒くなり目がくぼんで亡者みたいな形相になってくる。幸いにここはガスが全くなかったが、落盤がときどきあって、半畳くらいの石の下で手足をびくびくさせながら死んでゆく仲間もあつた。

以上が炭鉱作業の大体であるが、最も情けなかったのは、飛び込み臨時作業で原木おろしがある。これは坑道の支柱に使う坑木の松の原木が五十トン貨車に入ると、夜中だろうが雪だろうが、そのとき宿舎にいる者はかり出される。

これは貨車を一定時間とめておくと、それだけコスト高になるので、炭鉱側としては採算上一刻

も早くおろしてしまいたい。災難なのはこちらで、疲れて寝込んでいるときにたたき出される。皆、山から出しただけの巨木で、一貨車に三本くらいしか乗せられないのを腕力でおろすので、気を許すと命にかかわる。これで死んだり怪我したりした者もいる。このときばかりは腹が減っていても眠くても気合いを入れてやらなくてはならない。雨でも普通の番立ちには出なくてはならない。

このほかの作業として私が経験したのは道路舗装と採石作業。これはイルクーツクやライチハでやった。道路の方はアスファルトを作って、冷えないうちに運んで道路におろさなければならぬ。これがまたほとんど手作業で、溶かしたペトンと熱した砂との温度がうまくマッチしないと使物にならなくなる。仲間に工科出がいて、この調査が上手だったものだから、彼だけは工場側が大切にして彼のご機嫌を取り結ぶので、彼を通じていろいろな要求をしたことがある。

ここで忘れられないことが一つある。それはマインス三〇度くらいの日のことである。(規定では、零下二〇度以下になると屋外作業はないことになっていた) 河原に行ったが、砂は全く石のようでツルハシもスコップもはねつける。手足は痛くなるので、中止を監督に申し出た。「テンポー」というあだ名その男(対独戦で片手を失っていた)がタポール(斧)を振り上げて、隊長の私をおどした。私はそのときはもう覚悟をしたが、ついで来た警備の兵が私に味方をして、さっさとトラックに乗せて帰ってしまった。

また石割り作業というのがあって、石山に行き発破をかけて、ローム(鉄棒で長さ一・五メートルで先が尖ったもの)を割れ目に叩き込んで持てる程度にしたのを車に積む。なかなか重労働でノルマがむずかしい。しかし毎朝、作業整列をしたときに、前日の達成状況が絵で掲示される。飛行機から亀まであって、この石出し作業隊はいつも亀で、後で書くが、いわゆる民主運動のアク

ティールヴの連中が吊し上げる。サボタージュだの反動分子だのと言う、私は、帰国したらこの連中に石油かけて焼き殺してやろうと真底思った。

四、保健衛生

半年くらいは入浴が全くなく、着たきり雀だからシラミがわき、発疹チフスが流行、死者が毎日のように出た。遺体は薪を積むように積まれ、墓掘り班ができて埋めるのだが、何しろ石のように凍った土を掘るのだから、はかはいかない。私も三回ほどやったが、指が凍傷になり、もう少し遅かったら右の中指と薬指を落とすところだった。

このチフス禍は甚大であつたらしく、急に衣服類の消毒が励行されるようになった。最も象徴的だったのは、男性のシンボルの毛を剃り落としたことである。骸骨のようにやせ衰えた男が毛のない一物をぶら下げて列をつくっている図は、滑稽を通り越して鬼気迫るものがあつた。私自身、在

ソ中、三回やられた。

病気になる、ソ側軍医が日本軍医に手伝わせ診療するのだが、ひどいやぶばかりで、医者とも言えない連中だった。熱がないと病気とは認めない。脚気が多かったが、糸瓜のようにむくんだ足を引きずって働く人が目についた。

私も肺炎となり日本軍医の強硬な主張で入院したが、下熱したら三日目くらいには、病院の廊下をレンガで磨く作業をヒョロヒョロしながらやつた。けがをすると看護婦が来るが、彼女たちは血を流している患者の手当てをせず、時間・場所・状況をしていねいにノートしてでなければ手当てに取りかからない。彼女にとっては、ノートの方が患者よりも大切なのである。

五、洗 脳

捕虜にとつて、空腹も労働もつらいことだが、何とか命をつなぐ手だてもあるが、人間、良心の自由を無視されるのがどんなに屈辱か、悔しい

か、思想としての共産主義を押しつけ、具体的活動を要求し、ソ連に忠誠を、天皇制否定、反米活動諜報を約束させる。それを、父母妻子のもとに帰るのを絶対唯一の希望としている私たちへの帰国の条件とする。しかも、この洗脳活動を捕虜同士にやらせる。

中国に「豆がら豆を煮る」という詩があるが、いわゆるアクチーフと称する一群の日本人がいた。きわめて計画的に執拗に酷薄に強制する。私はこのときほど怒りと恥ずかしさと、そして絶望を覚えたことはない。ここで私は、私自身が身をもって経験させられたことを述べる。

入ソ二年目くらい、ある日、二十人くらいの者が呼び出された。いわゆる学校出のインテリたちだ。そして次の三問について小論文を提出せよという。

- 一、戦前の日本政府への批判
- 二、ソ連に対する見解
- 三、今後の日本の体制について

お互いにいい点を取って、一日も早くダモイ（帰国）に乗らなくてはと、せいぜい気に入るようなことを書いたと思うが、私の記憶としては、

- 一、日本の軍国主義の批判排撃
- 二、ソ連共産主義の実体をよく見きわめたい。全世界が注目している。
- 三、天皇制政治制度は廃すべきだが、天皇制そのものは否定しない。

特に第三の問題については何度も聞かれたので、よく覚えている。

数日後、私を含めて三人が呼び出された。見ると、戦前からの知人で満州国治安部参事官だったN氏、知人ではないが関東軍宣伝部軍属のS氏である。Nは委員長、Sは文化、私は政治宣伝ということで民主委員会執行部を構成せよ、労働は免除と。捕虜貴族である。私は共産主義を未だに信じていないと言ったら、先方の言うことが意外だった。

共産主義ということは一切言わない、宣伝をし

ないように、ただ日本文の立派な装幀の部厚な本、「ソ同盟共産党史」を解説すればいい、具体的には各バラックを巡って本の解釈だけをやれとあるので、私は拒絶もできず引き受けることにした。

今思えばいささか恥ずかしい話だが、この党史の第三章の史的唯物論は、学生時代よく読んだし、いささか得意でもあったので、(私はこの読書のために憲兵の調べを受けたことがあった)捕虜貴族の後ろめたさを覚えながらもやっていた。

ほかに委員会としては壁新聞の発行、各種スローガンの提出、S氏は演劇とか楽団を組織していた。この文化活動もイデオロギッシュなものソ側からとめられたので、「国定忠治」なんかやっていた。壁新聞の方も、私はうる覚えの日本の民話などを書いていた。

しかし三カ月くらいたったある日、突然、三人は一室に監禁された。ソ側の将校が来て「君たちはブハーリン的民族主義者で反動である。直ちに

執行部を改組せよ」と言うのではないか。これには全くびっくりした。何が民族主義なのか、ブハーリンなのか、少しも説明はない。監禁は三日ほどで解かれて、またシャベルを担いで作業に出た。

新しい執行部ができていた。この人たちは皆、小学校くらい出た工員や消防夫の前職者であった。消防夫氏は、いわゆるスタハノフィッター(労働英雄)で大きなパンを支給されるたくましい青年であった。

このいわゆる粛清からはっきり共産主義を表に出し始めた。たとえばメーデーで所内に横断幕を掲げるときに、執行部はプラウダの地方版のスローガンを用意したら、中央紙のものに書きかえを命ぜられたりした。私はその後、一、二回移動されて、またチェレンホーボに戻ったときには、また別な執行部になっていて、もう年配で、しかも思想的にはラジカルな人たちが構成され、いわゆる反動征伐が始まっていた。

戦前、私はソ連研究の機会を与えられたことが

あったが、党活動の公式を三段階に要約できるとした。一は共同闘争、二は相棒打倒、三は独裁確立と整理できたが、その通りだなと思った。初期は進歩的、プチブル的インテリによる啓蒙活動、第二段階ではほんとの労働者、農民の行動力ある者の蜂起、第三は真の指導者に対する権力付与、いわゆる弁証法的な組織法なのであった。

この第三段階の活動は目覚ましく、毎日作業の前後にはアジがあり、保守反動の暴露、吊し上げが猛烈になってきた。アクティヴという行動隊ができて、かつての先輩・上司・友人をも吊し上げる日が続いた。これは噂だが、他の収容所で自殺者が出たということも聞いた。無論、この連中は今思い出しても怒りが噴き上げてくるが、反面、人間の弱さをつくづく感じた。

ある友人が前職の関係で余りひどくやられるので、「適当なところで妥協して命を持って帰ろう」と言ったが、その人は「自分は世界史千年の批判に耐えたい。これだけの日本人の中に一人くらい

文天祥がいてもいいではないか、私はもう覚悟している」と答えられた。その人は私の帰国後、更に十年ほどして帰国した。この吊し上げに、ソ側は表面上全く関与しない。ただ、吊し上げられた人の中には暮夜ひそかに転出させられた人も何人かいた。

この卑劣な洗脳活動の端的な例を挙げておく。それは、やっと帰国列車に乗りハバロフスクを出た貨車の中で、例の執行部が「スターリン大元帥に感謝状を贈呈する」と言って、立派な巻物に署名するようにと達してきた。しかし断固拒否した人が何人かいたが、長い列車だから何人か分からなかったが、私の車では私ともう一人が断つた。すると、列車が相当時間とまると集会が開かれ、「署名拒否者は帰国させるな」とアジっていた。さすがにこれを理由に帰国できなかった者はないようだった。しかしナホトカ出航直前に何人かがストップになった。その中に私の友人がいたが、後にあちらで病死したと聞いた。

六、裁判

洗脳とは別に、戦前に日本共産党弾圧や軍への協力、反ソ活動などをした者に対する摘発は苛烈執拗に行われた。私なども月一回くらい呼び出されて尋問を受けた。担当者制服が一定しないので、どういふ職種の者か分からなかったが、ハバロフスク集結後また呼び出されたときは検察官だと思った。

「お前は起訴はしないが、対ソ積極分子である」と宣言された。五年間にわたる執拗な取調べの中でも、私には忘れられないことが一つある。それはある日の尋問で、私は行政官として農産物出荷のために道路建設をしたと述べたら、調書の署名に際して聞くと「関東軍の作戦のために道路建設をした」となっている。私は多少露語が分かったので署名を拒否した。すると通訳していた朝鮮人が拳銃を引き抜いて私に向けて「敗戦国民のくせに生意気言うな！」と言って発砲した。弾は私の後ろのドアを打ち抜いた。私はこの侮辱

を決して忘れない。

七、佳話

以上、項目別にできるだけ具体的に書いてきた。いずれも暗い話ばかりだが、どんなときにも人間の善意というものはあるものだといふ話を二つ書く。

1 炭鉱作業中、夜、上がって来て整列までに時間があるので、この時間に炭鉱事務所のわきのキャベツ畑に入って盗むのが流行した。

私も二番立ちで十二時過ぎに上がってくるのと、ある先輩と組んで敢行した。大きなのを一つ取ったとたんに、柵の外で番をしている先輩が畑の監視員と何か話している。「あの男は何をしているのか」の質問に対し、先輩は「彼は腹が痛くなったので畑に入って用便をしている」と説明しているではないか、とっさに私はズボンを下げる姿勢をとるとともに戦利品を坑内帽に入れて背負って出てきたら、その老人の

監視員は私の帽子をとんとんと叩きながら「今日はいいが、もうやるなよ」と言って行ってしまった。とんだ「安宅の関」の一幕であった。

2 ソ側の若い女軍医でスターリンググラード戦で顔に負傷していたが、美人であった。「グルシンカ」という名を今に覚えている。

栄養失調でうす暗いところでつまずくので「鳥目」と診断して、毎日夕食後に肝油を飲むよう言われた。おかげで二カ月ほどしたらよくなった。その間、あやしげな私の露語でいろいろ話し込んだが、今覚えているのは「ソ連の共産主義はまだ未熟だが、やがてほんとの共産主義が必ず完成する」と揚言していた。彼女のやさしさが私たちの間で評判になったが、三カ月くらいで転任になってしまった。

私は人間というものにほとんど絶望しかけていたが、この二つの話は当時、闇夜に明るい灯を心にともしてくれたことを今に覚えている。

むすび

こうして一九五〇年四月十七日、やっと舞鶴港に上陸した。青い松と満開の桜と白い制服の看護婦さんが目に飛び込んできたのをはつきりと覚えている。船中でいわゆるアクチーヴに対する報復騒ぎもあつたが、米軍と日本警察とのとりなしで大事に至らず、一泊してそれぞれ帰郷の列車に乗ったが、思えば飢餓の五年間、汚辱の五年間であつた。

私が戦災住宅にたどり着いたときに、懐には千円札が一枚あつた。老親、妻子五人を抱えて戦後の歩みの一歩が始まったわけである。